

言語比較と英語発音の教授

北 村 正 司

限定された時間内に、学習者の進歩をできるだけ促進しようとする外国語の教授計画の編成においては、外国語の科学的分析と記述に基盤を置く教材の選択が第一の要件である。次に考慮すべき重要な問題は、このような教材の習得にあたって、学習者の母国語の習慣がどのような障害を与えるかということの研究である。幼児は何等固定した言語習慣を持っていないから、両親や周囲の人々の発話を素直に模倣できる。しかし、母国語を学ぶ場合には事情は全く異なってくる。母国語に似た外国語の要素は、学習に容易であろうし、母国語と異なった要素は困難に感ずるであろう。したがって、教師は外国語と母国語の比較によって、学習上の問題点を洞察し教材編成に当らなければならぬ。Fries は

The most efficient materials are those that are based upon a scientific description of the language to be learned,
(1)
carefully compared with a parallel description of the native language of the learner.

といている。わが国の英語教育においては、英語と日本語の科学的分析と記述に立脚し、二つの言語体系を組織的に比較して、構造上の型に関する差異を学習の難易の角度から研究し、本質的で適切な教材を編成することが必要である。このような教材は効果的な教授法を導き出し、教授と学習の能率を高めるものと信ずる。以上の趣旨からここでは英語教授の諸領域のうち、発音の分野において英語と日本語の比較を行い、主要な学習の問題点を明かにしたい⁽²⁾と思う。

(1) Charles C. Fries, *Teaching and Learning English as a Foreign Language*, p. 9.

(2) 日英両語の発音と文法を比較したものとしては、英語教育研究委員会報告(研究社)中に、中島文雄氏の *Comparison of Japanese and English* がある。

—

英語と日本語の発音の比較は、この二言語の音組織を構成する分節音素 (Segmental phoneme) と「かぶせ」音素 (Suprasegmental phoneme) について行われねばならない。

英語の分節音素に関し日本の学習者が直面する問題点の所在をつきとめ、これを記述するためには、二言語についてそれぞれの分節音素表を作成し、これを比較するのが効果的である。シンガン大学英語研究所の *Test of Aural Perception in English for Japanese Students* (p. 8) には次の日英両語分節音素比較表が掲げられている。

この表の英語音素表記法は Fries のもので、そのほかに二重母音 /ai/ /au/ /oi/ の三個がある。つまり、Fries にしたがえば、英語(いわゆる General American)の分節音素は、子音二四、母音一一、二重母音三計三八個がある。これに対して、日本語の分節音素の数は、はるかにすくない。同研究所の日本語の分節音素表は、厳密なものでなく、

キアラ音素 /N, Q/

(/N/ はいわゆる「はねる音」/Q/ は同じく「ひまる音」で /r/ と表記する学者もいる。)

(市河三喜、服部四郎共編「世界言語概説」p. 153.)

すなわち、日本語には、子音音素一五、半母音素二、母音音素五、モーラ音素二計二四個の分節音素しかないわけ
で、英語の分節音素三八個との対照から見ただけでも、日本人の英語学習上の困難が示唆されるが、それがどのよう
な問題点を構成するかを考察しなければならない。ミシガン大学英语研究所では前掲の日英両語音素表に立脚して予
想される日本人学習者の聴覚上の問題点を次のようにまとめている。

1. /r/ /d/ および無気音の /t/ と混同される /l/。
2. /r/ と混同される /i/。
3. /p/ と混同される /v/。
4. /u/ と混同される /w/。
5. 両唇子音の前以外の音節の末尾で /g/ と混同される /d/。
6. /h/ と混同される /f/。
7. /c/ と混同される /e/。
8. /i/ あるいは /r/ の前の /t/ と混同される /s/。
9. 音節の末尾の /g/ と混同される /w/。
10. /s/ と混同される /r/。

11. /i/ あるいは /ɪ/ の前の /s/ と混同される /s/。
12. /a/ と混同される /e/。
13. 母音で分割される同じ子音と混同される子音の連結。(21と24に同じ項目があるのは問題作成の順序を示す。)
14. /s/ と混同される /θ/。
15. /i/ の前の /j/ たは /z/ と混同される /d/。
16. 母音の間の位置において /g/ と混同される /g/。
17. /z/ と混同される /θ/。
18. /j/ と混同される /z/。
19. /æ/ と混同される /e/。
20. /d/ と混同される /r/。
21. 母音で分割される子音と混同される同じ子音の連結。
22. /i/ または /ɪ/ の前で /j/ と混同される /z/。
23. /a/ と混同される /æ/。
24. 母音で分割される子音と混同される同じ子音の連結。
25. /æ/ と混同される /e/。

(The Research Staff of the English Language Institute, *Test of Aural Perception for Japanese Students*, p. 10.)

この表は聴覚テストの基準として、主な問題点を列挙したものであるが、変異音に関する問題点を補う必要がある。また調音の角度から見れば、もちろん他に考慮しなければならぬ問題が存在する。それで次にこれらを総合し、

いわゆる標準米語を比較の対象として考慮を進めてみよう。音素表記法は主として Fries に従うことにする。

1. 日本語音素の一型性に基因する問題点

英語の分節音素の数は日本語よりはるかに多いから、英語の二個またはそれ以上の音素が、日本語では一個の音素に入ることが予想される。このような場合の学習の困難さについて、Lado は次のように述べている。

Stated in more general terms, when one significant unit or element in the native language equates bilingually with two significant units in the foreign language we have maximum learning difficulty.

(Linguistics across Cultures, p. 15.)

この観察は発音の問題だけではなく、語彙、文法の問題にもあてはまるわけであるが、これを発音上から見れば、母国語の一音素が、外国語の二音素に等しいという関係が二言語間に存在するとき、学習上の困難は最大であるという結論になる。分節音素に関しては、日本語が一型組織 (One pattern system) を取り、英語が二型組織 (Two pattern system) を取っている場合がすくなくない。たとえば、日本語の /i:/ の一音素に対して、英語では beat, bit の /i:/ の二音素の対立がある。この二音素は音質の差で区別されるもので、/i:/ は /i/ より、ほとんどの場合長く発音されるが、長さはこの二音素の決定要件ではない。一方、日本語においては、母音の長短が意味を区別する。もっとも、日本語の長母音は、音素論的に見れば、前の母音をもう一度くりかえしたにすぎないのであるが、「オバサン」か「オバーサン」かは母音の長短で決定するのであるから、その対立は重要である。この言語習慣から、日本人はたいてい /i:/ を二音素の長さで識別しようとし、また /i:/ の方が普通長く発音されるため、識

別できる場合が多い。シシガン聴覚テストの *He's going to leave.* と *He's going to live.* の差異を聞き分ける問題について実験してみると、誤謬はほとんど皆無に近いことがわかる。しかし、このように長さの差によって識別しようとする努力は必ずしも成功するとはかぎらない。同じく、シシガン聴覚テストの *The man bit the dog.* と *The man beat the dog.* について実験してみたところ、前の問題の正解者の三割までが失敗した例がある。英語の母音の長さはその音声環境によって変化し、無声子音の前に来る場合は有声子音の前に来る場合より短くなるが、後の問題においては *beat* の /i:/ が後続の無声子音 /t/ の影響によって短く発音されるため、混同が生じたものと考えられる。これを要するに、多くの場合 /i:/ と /ɪ/ の対立は、日本の学習者には識別上の問題点とならないが、学習者はその識別を長さという非音素的特性を通して行うことが多いという事実留意し、音素的特性である音質を認知するよう指導する必要がある。

識別の場合とは異って、/i:/ と /ɪ/ を対立して発音することは、日本の学習者には極めて大きな問題点を構成する。長さの差によってこの二音素を区別するように発音すれば、音質の差が欠如しているから、英語国民を混乱させる。それで音質を区別して調音することが重要であるが、両者のうち /i:/ は「イ」によく似た音であるから、問題点は /ɪ/ の方に存在する。/ɪ/ は /i:/ より舌とあごの位置が少し低く弛緩した母音である。この音は日本語にないため、「イ」を転用し混乱を生ずる傾向は著しいものがある。ある英語教育講習会においても、当時上映中の米画の題名 *"I Want to Live"* を *"I Want to Leave"* と発音し、米人講師に混同を与えた人々があったくらいで、学習者にはむずかしい音である。また、/ɪ/ の調音指導においては、/e/ との混同が学習者に生じやすいことにも注意しなければならない。日本語の調音点と比較すると、/ɪ/ の舌とあごの位置は「イ」と「エ」の間である。その音色も場合によっては日本人の耳には「エ」のように聞える。たとえば、*pin* が *pen* のように聞えるから、学習者は

舌を弛緩し、/i:/よりも舌を下げることに注意を集中する間に /i:/ が /i:/ になることも珍しくはない。このような事情であるから、以上の三音素については、特に集中的な練習を積むことが大切である。

/i:/ と /i:/ の対立と似てはいるが、調音上さらに複雑な問題点を構成するものに、pool, pull の母音 /u/ と /ɔ:/ の対立がある。識別上は、前者が普通長く発音されるので、/i:/ /i:/ の場合と同様に、学習者はこの非音素的特性を通して二音素を聞き分けようとする。その結果音質の差を認知する努力に欠け、調音上の困難の解決を遅らす傾向が強い。日本語の「ウ」は /ɔ:/ より舌の位置はずっと前方であって唇の円めも普通ない。このように唇を使うのを一般に避けるのは日本語の調音的特性である。また舌の中央部を使うことが多いのもその特性である。この言語習慣から考察すれば、英語の /ɔ:/ は唇を円くし、かつ突出し調音域をずっと「ウ」よりも後方にするのであるから、その調音は日本の学習者に大きな困難を与えることが予知される。/ɔ:/ は /ɔ:/ より舌の位置がすこし低く、弛緩した母音で、/ɔ:/ とは音質が異なる。また唇はすこし円められる。この音を発する場合の筋肉の弛緩は日本人に不得手なことが多く、Gerhard も “Japanese students often fail to make this sound sufficiently relaxed.”⁽¹⁾ と述べている。/ɔ:/ と /ɔ:/ との音質の差を区別して発音することは重要な問題点となる。

(1) Robert H. Gerhard, *A Handbook of English and American Sounds*, p. 133.

日本人に同じように聞えやすい英語の音素に boat, bought の母音 /o/ と /ɔ:/ の対立がある。/o/ は日本語の「オ」に近い位置で唇をもうすこし円め /ɔ:/ の方に移動する音で、/ɔ:/ は「オ」より舌の位置は低く、あごはもっと開いている。あごの開きは /a/ を発音する時とほとんど同じくらいであるが、唇は円みを帯びる。Fries や Pike は /o/ を単母音と解釈し、Trager, Smith などは二重母音と解釈するが、米音では [u] への移動がすくないので

日本の学習者には認知上 /ɔ/ との区別が付かないことが多い。また、たとえば *bought* の /ɔ/ を日本語の「オー」で発音すれば、*boat* のように聞え混乱を引き起す。

日本人の耳に「ア」と響く音に /a/ /e/ /æ/ がある。Vernon Brown は /a/ は大体日本語の「ア」に、また強勢が置かれる場合には「アア」に似ているといっている。⁽²⁾ /e/ は /a/ より舌の位置が高い中央母音で、強勢のある音節では、舌の位置はすこし低くなり筋肉は比較的緊張する。また、強勢のない音節では筋肉は最も弛緩する。筋肉の弛緩については、Gerhard が “The sound is extremely relaxed even when occurring in a fully stressed syllable.” といっている。/æ/ も日本語にない音で、舌の位置は /a/ と /e/ の大体中間にあり、唇の両端は左右にひろげられる。/a/ /e/ /æ/ の三音の相互間の対立を識別することも調音することも、日本の学習者には問題点となる。また、*bird, heard* の /ɜr/ は音声学的には米音の /r/ に似た母音で、その習得はアメリカの子供たちにもしばしば大きな困難を与えらると思われれるものであるが、日本人には特にむずかしい。この音は英語の音組織の中でもっとも識別しやすい母音の一つであるといわれているが、⁽⁴⁾ 日本人には日本語の「アー」のように聞え、前記の二語と *bard, hard* との識別に抵抗を感じ、また調音上も /ɜr/ /ɜr/ のいずれも「アー」と発音し混乱を生ずることが多い。

(2) Vernon Brown, *Improving Your Pronunciation*, p. 32.

(3) Robert H. Gerhard, *Ibid.*, p. 116.

(4) James Carrell and William R. Tiffany, *Phonetics*, p. 102.

英語の /b/ /v/ は日本人の耳にはともに /b/ と聞こえ識別上の大きな問題点となる。聴覚テストを試みると、その成績は極めて悪いことがわかる。/f/ と /v/ は日本語にない音であるから調音上でも問題点となる。/f/ の代りに、[h] や両唇摩擦音の [ɸ] を用いたり、/v/ の代りに /b/ を用いるのも、日本語の習慣のあらわれであ

るから、英語の発音において国語とは別の習慣を養成するところに困難がある。

英語の /s/ と /θ/ /z/ と /ð/ も日本人の耳には同じ音、つまり前の一対はいずれも /s/ 後の一対はいずれも /z/ に聞える。聴覚テストの実験から見ても、最小対語 (Minimal pair) を区別する問題の成績は極めて悪く、これら二対の子音の識別は学習上最大の問題点を構成していることがわかる。調音上の問題点としては、/θ/ /ð/ は /t/ /d/ と同じように日本語にない音であるから、容易とはいえないが、その要領を会得することはさほどむずかしいことではなく、困難はむしろ無意識的な調音習慣を養成することにある。実際問題としては、英語の /z/ の調音の方が /θ/ より困難であると考えられる理由がある。ある英語教育講習会において、clothing と closing を区別して発音する課題が与えられた。前者の発音は全員が合格したが、後者の /z/ の発音はどうしても合格することのできない人々が数名あった。それは /z/ に /d/ を代用したからであって、日本語の特性から生じた誤りであると思う。服部四郎博士は

日本語（東京方言）の「ザ」「ズ」「ゼ」「ヅ」（母音に先立たれない場合）の子音は「z」でなくて、同じ調音点の閉鎖音から「n」へわたって行く、破擦音「dz」である。大体、「ツ」の子音である破擦音「ts」の有声音であるといえる。多くの日本人は純粹の摩擦音「z」を発音するには非常に練習を要する。

（服部四郎「音声学」p. 96.）

といっている。また、金田一春彦氏は

日本語は、また、摩擦子音が少いことが特徴である。純粹なものとは s と z の二つしかない。z も東京語などでは実は dz で、一

種の破擦音——破裂音と摩擦音が接着した音である。

(金田一春彦「日本語」p. 73.)

といている。要するに学習者は *cars* を *cards* のように発音する可能性があるわけである。この場合、問題は [dz] の前半の「p」を除去することにあるが、人によっては国語の習慣から舌先が歯茎に触れるのを抑制することがひじょうに困難になる。英語の /s/ /z/ の調音法には二種がある。一つは、舌端が上の前歯の歯茎の附近に対して調音する方法であって、これが普通のものであるが、このほかに舌先を下の前歯に軽く接する構え方がある。日本人には後者の方が容易なものと考えられる。この方法によって、舌先を下の前歯に接することに注意すれば、舌先が上の歯茎に触れるおそれがなくなるわけで、[dz] の [d] を除去し、正しい /z/ の発音に導く適切な方法であると思う。

子音として日本の学習者に認知と発表の両面にわたって、もっとも大きな困難を与えるのは /h/ と /r/ の対立である。聴覚テストにおける両者の区別の成績は極めて悪い。ラ行の子音は弾音であるが、舌先を弾いて歯茎を打つ時の構え方は /r/ に似ている。要するに摩擦音 /h/ と /r/ の二つの行程を経る。⁽¹⁾ 標準米語の「h」はアメリカの子供たちにも習得がもっとも困難な音に属すると思われる。それは彼等が最後に習得する音で、幼年期の発音のもっとも普通の特徴は、/h/ の代りに /w/ を用いることである。⁽²⁾ 日本語にはこの音にいくらか似たラ行の子音があるから、学習者の直面する困難はさらに大きい。米音の「h」や摩擦音の「h」を発する場合には、舌先が口蓋に触れることがない。この舌先の抑制が日本の学習者に大きな困難を与える。Lado はスペイン語を母国語とする学生を対象とする次のような標準米音「h」の指導法を発表している。

(1) The teacher tells the student to pronounce a prolonged Spanish trilled *r*, which he can pronounce of course without difficulty. (2) He is asked to pronounce it again with the tip of the tongue farther back on the plate. (3) The teacher pronounces the sustained trilled *r* to encourage and guide the student. (4) To help demonstrate the position of the tongue the teacher holds out a hand with palm upward and fingers bent slightly back. (5) The student is asked to pronounce the same trilled *r* bending the tongue farther back at every try until presto-out comes an untrilled *r* often to the pleasant surprise of the student himself, who has been struggling with the problem without success. It is sometimes helpful to point out to the student that there is no contact or vibration between the tip of the tongue and the palate. ⁽⁶⁾

(1) 大西雅雄「英語発音の研究」p. 89.

(2) James Carrell and William R. Tiffany, *Phonetics*, p. 215.

(3) Robert Lado, *Teaching General American r to Spanish-Speaking students, Selected articles from Language Learning*, Series 1, p. 142.

これは誠に行き届いた指導法であって参考になる。日本の学習者にはラ行の子音から始め同様な行程を用いて指導する方法が考えられる。また /r/ の唇の円めを会得させるために、円唇母音の前の「r」から練習させるのも適切な方法であると思う。/r/ の教授法としては、口頭の説明だけでなく、ストロー、指などを用いて発音の要領を会得させることも有効であろう。日本人が /r/ と /l/ を混同するところについては Jones が、"The Japanese are generally unable to make any kind of l with certainty. They confuse it with r, and use varieties of l and r indiscriminately for both l and r when speaking English." ⁽⁷⁾ という。日本人のための /l/ の指導法については Jones が

In the first instance the best results are obtained if the Japanese learner practices 1 with the tip of the tongue pressed firmly against the upper teeth. When he has mastered the sound pronounced in this way, he may proceed to form an 1 in the normal English position against the teeth-ridge.⁽²⁾

- (1) Daniel Jones, *An Outline of English Phonetics*, p. 163.
 (2) Daniel Jones, *Ibid.*, p. 164.

といている。これはたしかに有効適切な方法である。このほかに、/ɔ/ の場合のように舌尖をかんでこの音を出す練習から始める方法もある。

2. 日本語の半母音の特性に基因する問題点

日本語の半母音には既述のように /j/ と /w/ の二つがあり、前者は「ヤ」「ユ」「ヨ」、後者は「ワ」にあらわれるが、ともに子音的要素が極めてすくない。この二音はいわゆる漸強二重母音であって、[ja], [ju], [jo], [wa] ([j] は副音をあらわす) であるといわれている。英語の /v/ (Jones 式では [v]) は有声「わたり」音で、高前舌母音 /i/ と同じような位置から、舌が次の母音へ速かに移動する時生ずる音である。日本語の /j/ とは違って、その後にはどんな母音でも続くことができる。日本語の /j/ と英語の /v/ とには上記の差異があるので /v/ の調音は日本の学習者に困難であるが、特に *yeast* や *yes* の場合にむずかしく、前者では /v/ が脱落し、後者では /v/ が「イ」になることが多い。英語の /w/ は舌が /u/ の位置から次の母音に移る「わたり」音であって、前者と共に日本の学習者には舌の移動法がむずかしく、この音は円唇を伴って始まるのでその点にも困難がある。特に /u/ /u/ が後続する場合が困難で、*wool*, *wood*, *woo*, *wound* などは多くの練習を要する。誤の多くは /w/ が日本語の「ウ」

になるか脱落するかのいずれかとなってあらわれる。

3. 音素連結に関する問題点

すべての国語には、特有の音素連結の型がある。したがってこの角度から日英両語を比較して、問題点を検討することが必要となってくる。このことについて Fries は次のようにいっている。

This determining of the distinctive sounds that differ is only the first step (although an important one) in the scientific comparison of the language to be learned with the native language of the learner. Each language has not only its own set of distinctive sound features; it also has only a limited number of characteristic sequences of consonants and vowels which make up the structural pattern of the syllables and words. From this fact arises the importance of finding the "positions" in which the distinctive sounds can occur, and the "clusters" which they may form.

(Charles C. Fries, *Ibid.*, p. 16.)

外国語の音の認知と発音上の難易は、分節音素の特性にもよるが、またその連結分布の型によっても支配される。この点を考慮して、まず日本語の音素連結、つまり音素が結合しどのような音節を組立てるかということを音節表で調べてみよう。そこで問題となるのはモーラと音節の区別である。モーラとは音の相対的長さについていうもので、日本語では子音音素と短母音音素との連結、あるいはそれに等しい長さを持つ音素または音素連結をいうのであるがここでは英語の音節との比較が重点であるし、モーラを音節として取扱っても大した違いは起らないようであるから、これを音節として述べて行くことにする。⁽¹⁾日本語の音節表にも学者によって若干の差異があるが、次に野元菊雄

氏のものを用いる。(2)

(1) 野元菊雄「国語の音韻の特色」朝倉書房国語講座第二巻「音韻の理論と教育」pp. 65~66. (2) 同 p. 72.

	'i	'e	'a	'o	'u	'ja	'jo	'ju	'wa
	イ	エ	ア	オ	ウ	ヤ	ヨ	ユ	ワ
ヒ	ヘ	ハ	ホ	フ	ヒヤ	ヒヨ	ヒユ		
ギ	ゲ	ガ	ゴ	グ	ギヤ	ギヨ	ギユ		
キ	ケ	カ	コ	ク	キヤ	キヨ	キユ		
	デ	ダ	ド						
	テ	タ	ト						
ビ	ベ	バ	ボ	ブ	ビヤ	ビヨ	ビユ		
ピ	ペ	パ	ポ	プ	ピヤ	ピヨ	ピユ		
(ギ)	ゲ	ガ	ゴ	グ	ギヤ	ギヨ	ギユ		

前の表の音節数の総計は一七七であって、外国語にくらべるとすくない方である。いま母音をV、半母音をS、子音をC、撥音をN、捉音をU/で示めせば、日本語の音節構造は次のようになっていことがわかる。

/CV/, /CSV/, /V/, /n/, /r/

その音節構造の基本的特色は、音節が母音で終わっていることである。これは、いわゆる開音節で、それに反して英語は子音で終る閉音節に富んでいる。しかも /VC/ (at, on), /CVC/ (dog, bat) はもとより、 /CCVC/ (swim, bread) /CCVC/ (spring, strong), /CVC/ (silk, desk), /CVCVC/ (tempt, next) などのような種々の複雑な構成があるから、その音節数は日本語よりずっと多くなる。このことからしても日本の学習者が直面する困難が予想される。

日本語の音節構成の基本的な型は、 /CV/ 型であって、 /a/ /i/ /u/ /e/ /o/ も、 /r/ という子音音素と母音音素とが結合していると解釈しているわけである。ここに注意すべきは音節の頭部に子音が二つ以上くることがないという事実である。英語では二個以上の子音連結 (Consonant cluster) が、音節の頭部または末尾にくるのは普通のことである。Fries によれば、語頭または母音の前では総計三九の子音連結が起り、母音の後にくる子音連結は全部で一五一である。後者のうち、六五は単一形態素の語尾に起り、八六は屈折語尾として /z/ /s/ /d/ /t/ を付加することによって生ずる。⁽¹⁾したがって、日本の学習者は国語の習慣の強い力によって、英語の子音間に母音を入れ、たとえば Smith が [sumis(u)] となったり、末尾の子音の後に母音を付けたりするような間違いを犯しやすい。また日本語の捉音 /r/ と撥音 /n/ は単独で音節を構成する特性を有するが、綴字の影響もあって、たとえば happy の /p/ の前に捉音が入り、grammar の /m/ の前に撥音が入って発音はゆがめられることがある。また、two や cat の

/t/が/s/のように発音されるのも日本語の音節構造の性格が影響したものである。

(1) Charles C. Fries, *Ibid.*, p. 17 ff.

4. 変異音に関する問題点

a. 日本語の変異音に基因する問題点。日本語では音素連結において、母音一般が前の子音に影響する傾向が強い。たとえば、ハ行の子音は、現在では「イ」の前で「ç」, 「ウ」の前で相当多くの方言において「φ」, 他の母音の前で「h」というように、うしろの母音によって変っている。これなどもこの傾向の一つのあらわれともいえよう。この傾向は、「イ」の前では子音の口蓋化となってあらわれる。この現象はサ行とザ行において特に顕著である。もっとも、歴史的にはこの二つの行の子音はすべて「i」「ɜ」であったという説があるが、上記の現象を広義の子音口蓋化と称することができよう。⁽¹⁾この傾向は英語学習上 *see* と *she* におけるような /s/ と /ʃ/ の対立の習得に干渉を加える傾向がある。聴覚上はこの二音の識別には困難がすくないが、問題は調音にある。このことは英語の *phabet* の *o* の読み方を指導する場合に早くも遭遇する問題点であるが、学習者の方言によってはなかなか抜けがたい困難点であって、これに鑑みても、英語数授のためには、日本のいろいろな方言と英語との比較を行う必要が痛感される。ハ行において「t」の子音が口蓋化され「ç」になるが、この音を *he* の /h/ に変えて発音すると *she* と混同される傾向がある。また、日本語の「ヒ」は方言によっては「シ」に転化することがあるが、この場合は *he* と *she* の区別が全くなくなるおそれがあり複雑な問題点を構成する。

(1) 野元菊雄 前掲書 p. 55 ff.

日本語の撥音 /n/ には変異音が多い。その変化は [p, b, m] の前では [m], [t, d, dz, n, r] の前では [n], [k, g, ŋ] の前では [ŋ], [s] の前では [w], [a, o, u, w] の前では [u], [i, e, j] の前では [i] 語の末尾では [ɳ] の形を取るものと見ることができ⁽¹⁾。このような変異の影響によって学習者の英語の発音はさまざまなゆがみを生ずることがあるが、特に警戒すべきは単独に発音された「パン」[pan], 本「hon」などの /n/ を英語に持ち込み pen, ten などの /n/ に代用することである。

(1) 浜田敦 「日本語の音韻」講座「日本語」第二巻 p. 31.

b. 英語の変異音に関する問題点。いま、key と ski の各々の [k] を比較すれば、前者の [k] の破裂には強い呼気が伴うが、後者の [k] にはそれが起らない。しかし、ski の [k] を key の [k] で発音しても、人為的ではあるが、その意味は変らない。これに反して、ski の [k] と key の [k] を発音すれば、その [k] は [s] と混同される可能性が多い⁽¹⁾。そこで、これを日本語の帯気音、無気音と比較してみる必要がある。このことに関して服部四郎博士は次のようにいっている。

日本語（東京方言などの）パン [pan], 鯛 [tai], 貝 [kai] などの [p] [t] [k] は英語の [p] [t] [k] ほど気音が強くないがやはり帯気音の部類に属する。しかし、東京方言でも条件によって気音の強弱が異り、肩 [kata] の [k] は中 [naka] の [k] より気音が強く、後者は全く気音がない⁽²⁾。

したがって、英語の key などの帯気音を日本語の帯気音 [k] と発音すれば、まず混乱を生じないようであるが、もっと強い氣息を伴うように練習することが一層望ましい。これに反して日本語の無気音を英語の有気音に転用すれ

ば、混乱が生じ、tip が dip に、tea が d に聞えるわけで、これらは実際に生じている誤りであるから指導上留意する必要がある。いずれにしても、帯気音と無気音の混同は、Gleason が、“A person that says [k=iy] or ski [skʰiy] sounds funny.”⁽³⁾と述べているように、意味に変化を生ずるおそれがない場合でも避けねばならない。

(1) H. A. Gleason Jr., *An Introduction to Descriptive Linguistics*, p. 163 ff.

(2) 服部四郎「音声学」p. 138.

(3) H. A. Gleason, Jr., *Ibid.*, pp. 165~166.

米語の子音の変異音で日本の学習者に特別の困難を与えるものに有声音 [tʰ] がある。この音のあらわれる位置は、(a) 母音間の無強勢の母音の前 (butter, get another), (b) 音節をなす /l/ の前 (battle, beetle), (c) /l/ と無強勢の母音の間 (consulted, wanted), (d) /n/ と無強勢の母音の間 (twenty, wanted), (e) 無強勢の母音の間 (at another place; if it is convenient) である。⁽²⁾しかるに有声音 [tʰ] は日本人の耳には [d] と聞えるから、米語を聞き分けるにはこの音が一つの障害となる。たとえば latter と ladder, putting と pudding, atom と Adam の区別が困難である。文の場合においても、たとえば I hit him. [ai hɪtɪm] が I hid him. [ai hɪdɪm] に聞えるわけである。この音は主として聴覚上の問題点としてもいい。教育のある人々の談話においては、無気無声音 [t] と自由変異をなし、また形式張った場合や話者が正確を期する場合は無気無声音 [t] が普通であるから、有声音 [tʰ] の調音の指導は強いて行う必要がなく、また上級の段階に残してもいいと思われる。

(2) Arthur J. Bronstein, *The Pronunciation of American English*, pp. 74~75.

英語の「かぶせ」音素には、高さ (Pitch)、強勢 (Stress)、接続 (Juncture) の三つがある。次にこれらの音素に関する学習上の問題点を考察してみよう。

1. 高さ音素に関する問題

英語の高さの音素には、最高 (Extra-high)、高 (High)、中 (Mid)、低 (Low) の四段階がある。四つの段階の間隔は絶対的なものでなく、個人によって差異があり、また同一個人でも発話の時によって変化する。音素論的に伝達上重要な価値を持つのは四段階の相対的間隔である。高さ音素は単独では、ほとんどあるいは全く無意味であって、意味を伝達するのは、高さ音素が組合わされた全体としての音調曲線 (Intonation contour) である。音調曲線には多数の種類があるが、外国人学習者が、母国人と同様に複雑な音調曲線を駆使することを望むのは無理である。Pike はその理論によってミシガン大学英語研究所が選択した高—低、高—中、中—高、高—低—中の四つの音調曲線についてその適正なることを論じ、外国語教授における最小数の音調曲線選択に関して指針を与えている。⁽¹⁾

(1) Kenneth L. Pike, *The Intonation of American English*, pp. 168~169.

日本語の音の高さの段階については、Bloch が次のようにやはり四種の度合を区別している。

/ 1 / highest pitch : the highest level reached in normal conversation ; near the upper limit of the speaker's voice range

/ 2 / higher mid pitch : near the middle of the speaker's voice range ; slightly lower on the last syllable of a phrase

than elsewhere

/3/ lower mid pitch : about three tones below /2/; slightly higher on the last syllable of a phrase than elsewhere

/4/ lowest pitch : near the lower limit of the speaker's voice range ; slightly lower on the first syllable of a phrase than on a medial syllable, and lower still on the last syllable—here often well below the normal speaking-range⁽¹⁾

[例] ma⁽²⁾ntoyuu zo⁽²⁾sokinanomodaroro

(1) Bernard Bloch, *Studies in Colloquial Japanese IV, Phonemics, Joos, Readings in Linguistics*, p. 333.

(2) Bernard Bloch, *Ibid.*, p. 345.

音韻論的には、日本語でも大体四段階で間に合うようである⁽¹⁾。しかし、日本語の音調は英語よりも比較的単調に聞えることが多いのは、高さの絶対的な差が小さいのと、その利用が活発でないからであろう。また Bloch も注意しているように、日本語の音調は、発話の終末部に至って、声が低く下って、人の耳に感じられないほどになってしまうことが多い⁽²⁾。発話の終末部で声の高さが下ってその段落を示すことは、英語でも下降調に表われるのであるが、日本語のように終末部がはっきりしないため意味の不明瞭を来すことが多いのとは事情を異にする。しかし、英語の基本的音調曲線を学習者に会得させることは必ずしも困難でない。問題は音調曲線と意味の相関関係を認識させ正しく用いるように指導することにある。

(1) 野元菊雄 前掲書 p. 100. 「国語学辞典」 p. 47.

(2) 佐久間鼎 「日本音声学」 p. 634 ff.

2. 強勢音素に関する問題点

英語には四つの強勢音素がある。いま、*dusty* と *windows* を個々の語として発音すると、両語とも「第一強勢＋弱強勢」の連結を持っていることがわかる。しかし、二語を *dusty windows* という構造にすると、*dusty* の第一音節は第二音節より強いけれども、*windows* の第一音節より弱くなり、第二強勢を受ける。また *briefcase* の第二音節は弱強勢ではなく第三強勢を受ける⁽¹⁾。英語のアクセントはその強さによって、*/////////* (弱強勢の記号は必要のない場合にはつけない) の四種に区別されるのであるが、日本語のアクセントは高さのアクセントであって、高低の二段から成っていると見る人が多い。また、英語では *increase* と *increase, differ* と *defer* のように強勢によって意味が変る場合が多いが、日本語ではアクセントによって意味が異なる場合もあるが、東京語と京阪語ではアクセントが逆になっている場合があるように、必ずしも絶対的なものではないと思われる。以上の事情から英語の学習者は英語の強さアクセントに高さアクセントを転用するおそれがあり、また強勢に敏感でないためその型の学習に苦勞し、間違を犯しやすい。かの *green house* (緑の家) と *greenhouse* (温室) の強勢の差などはさらに困難な問題である。しかも四種の強勢を聞きわけけることはひじょうにむずかしい。しかし、英語国民でも必ずしも四種の区別ができるとは限らない。Hill も “American speakers have no difficulty in recognizing three grades, but a fourfold distinction causes trouble for many.”⁽²⁾ といひ、四つの強勢を聞き分けけることのできない人に対して、*“It is necessary to advise the reader that if he still has trouble with four stresses after having worked through the possible distinctions which have been given, he should consult a competent analyst and let the analyst sort out contrasts for him.”*⁽³⁾ と忠告しているところである。アメリカ人で四種の強勢を区別できない人々の方言では、強勢音素は三種から構成され、第二強勢と第三強勢が一諸になっている。学者の中にも *three-stress system* を唱える人もあるから、⁽⁴⁾ わが国の英語教育ではこの間の事情を充分斟酌すべきである。

- (1) Archibald A. Hill, *Introduction to Linguistic Structures*, p. 16 ff.
- (2) Archibald A. Hill, *Ibid.*, p. 18.
- (3) A. A. Hill, *Ibid.*, p. 18.
- (4) Arthur J. Bronstein, *Ibid.*, p. 249.

3. リズムに関する問題点

前述のように、日本語には高さアクセントはあるが、強さアクセントはない。このことから、日本語の各音節は、日常の会話でも、同じ長さに発音される傾向が大きい。しかるに英語においては、ある音節は特別の重さを受けて、他の音節よりも長くいわれ、ある音節は通例あいまいになって他の音節より早く言われる。文の第一強勢は、ほぼ同じ間隔をおいて起り、これらの第一強勢間に、多くの音節がくれば、それらの音節はおしつぶされてあいまいにされる。また、もし二つの第一強勢間に少数の音節よりない場合は、これらの音節の発音にはもっと時間をかける。⁽¹⁾これが英語のリズムであるが、日本語のリズムは断音的 (*staccato*) であるから、日本人は英語のリズムの学習に相当の困難を感じる。

(1) C. C. Fries, *Ibid.*, p. 23. (太田朗訳注「英語の教授と学習」p. 41.)

英語の発話は速度が進むにつれて、その発音が変化する。外国人に理解が困難になるのは、速度よりもむしろ音節が弱化し、分節音素の脱落や変化が起ったり、閉鎖連接が行われたりするところにある。Lado の示している次の例は、発話の速度が増すにつれて、その発音が変化して行く様相をあらわすものとして参考になる。

He can understand them.

/hí kéén anderSTÁÈND ðem/

/hí ken anderSTÁÈN dem/

/híkən andrSTÁÈNem/

/híkənərSTájəNəm/

(Robert Lado, *Ibid.*, p. 34.)

大文字は文強勢を受ける音節。最初の表記内の E の \dot{E} は \dot{E} にアクセント符号のついたもの。上田明子訳注「文化と言語学」ではこの点の印刷が明瞭になっている。なお、Lado は語または句強勢として、第一強勢、第二強勢、弱強勢を、可動性強勢として文強勢を認めている。

上の例に示めされたような発音の変化は、認知と発表の両者にわたる問題点を構成する。つまり弱形、縮約、固有の音の変化、閉鎖接続が問題となる。弱形に関し Thomas が “The person who emphasizes every word, no matter how subsidiary, in every sentence, speaks incorrectly and ineffectively.”⁽¹⁾ と言っているのは、わが国の学習者にもよい示唆であり、指導上留意すべきことである。

(1) Charles Kenneth Thomas, *An Introduction to the Phonetics of American English*, p. 114.

4. 接続に関する問題点

接続には、上昇、下降、平坦の三つの末尾接続と内部開放接続が音素として認められているが、内部開放接続の反対が開鎖接続であって、両者の差異はゆっくりとした発音の *night rate* と *nightrate* の間に見られる。前者に開放接続が起り、後者は閉鎖接続を持っている。開放接続は必ずしも語の境界に起るとはかぎらないが、わが国の国語習慣と

の相違から、特に学習の問題点となるのは、速い発話において閉鎖連接によって語の境界の認知が困難に感ぜられる場合であると思う。前項において触れたように、英語の早い発話では閉鎖連接が多く起り、音節の最後の子音が、次の音節の最初の子音になることがある。たとえば、eat を一秒間に四、五回の速度で発音すると、eat-eat-eat は、まず eat-eat-at になり、次には tea-tea-tea となる⁽¹⁾。また、Attend it. は /etend it/ と発音されることもあるが、閉鎖連接が起って語の境界があるとすれば /r/ と /d/ の間へ移され、/etend dit/ と発音されることもある⁽²⁾。このような閉鎖連接や固有の音の変化することは、現代の日本語にはほとんどないから、英語の速い発話を聴取するのに学習者はひじょうな困難を感じる。したがって、これらの項目に関する指導は、特に留意して行う必要がある。

(1) James Carrell and William R. Tiffany, *Phonetics*, p. 248.

(2) Robert Lado, *Ibid.*, p. 49.

英語の発音聴取能力の養成は、問題点を解決するような教材編成によって、学習者に認知と調音の練習を視聴覚教具を補助として行えば、何人も耳が鋭敏となり一通りの力を持つようになることは経験の教えるところである。しかしながら、われわれの国語生活において、発話中のある音または音節が聞えない場合でも、しばしば推測によってこれを補い発話を正しく理解できることも考慮に入れなければならない。Potter は英語を主体として音の聞こえ (Sonority) について次の七段階を示めている。

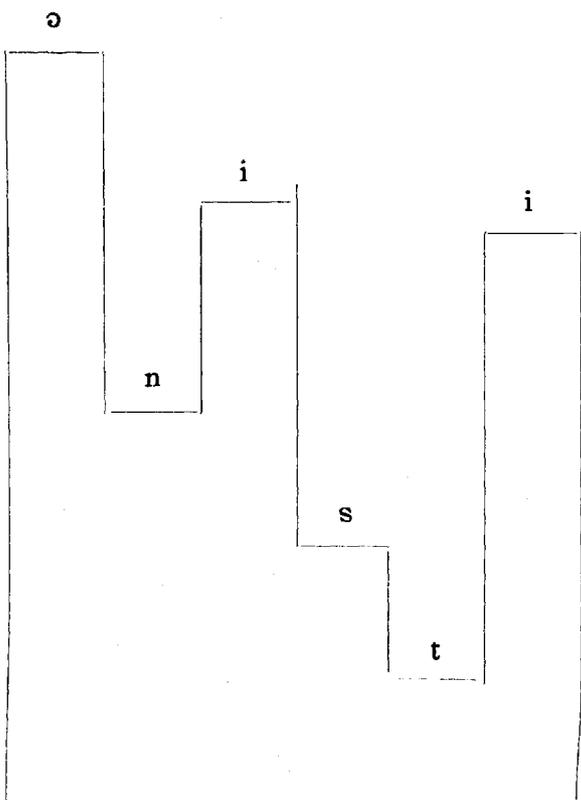
1. Voiceless plosives p, t, k, voiceless fricatives f, θ, s, ʃ; and voiceless affricate tʃ.
2. Voiced plosives b, d, g; voiced fricatives v, ð, z, ʒ, ʒ, h; and voiced affricate dz.
3. Nasals m, n, ŋ; laterals l, ʎ, ɹ.

4. Trilled r ; dark l.
5. High vowels u, i ; semi-vowels w, j.
6. Middle vowels ; low front vowels, other short vowels ; diphthongs.
7. Long low back vowels a: and o:

(1から7へ向って聞えが高くなる。)

(Simeon Potter, *Modern Linguistics*, pp. 32-33.)

発話においては、各々の syllable の crest of sonority があるが、Potter は honesty の聞えの度合を次のように図示してゐる。(1)



Potter は honesty の [t] はひじょうに聞えが低く、普通の会話においても、どんな鋭敏な耳でも聞えないが、他に [ɲispi] とか [ɲiski] というような語がないから瞬味になるおそれがない⁽²⁾ということ⁽²⁾を述べている。この事実に鑑みても英語の聴取は単に耳の訓練や発音器官の理解だけではなく、やはり総合的な英語の実力⁽²⁾に依存するといわなければならぬ。

(1) (2) Simeon Potter, *Ibid.*, pp. 34~35.